

# 『西国立志編』 3 訳稿に見られる翻訳過程

金子 弘

## 【添削】

中村正直訳『西国立志編』には、3種の訳稿が知られている。3訳稿の先後関係は、静嘉堂文庫訳稿↓大久保文庫訳稿↓狩野文庫訳稿であると推定される。

### 一. 『西国立志編』の訳稿

中村正直の『西国立志編』は、明治期を代表するベストセラーであり翻訳である。その訳稿が現存している点でも興味深い。荻原隆『中村敬字研究—明治啓蒙思想と理想主義—』（早稲田大学出版部、1990）によると、訳稿の所在は次のようになっている。

『西国立志編（自助論）』一三編一冊（明治三十四年、同人社） 原著 Samuel Smiles, *Self-Help*, 1859

『西国立志編』の訳稿の所在については以下のとおり。

『西国立志編』第一次訳稿一冊 静嘉堂文庫所蔵

『西国立志編』第二次訳稿四冊 東北大学図書館狩野

亨吉文庫所蔵

『西国立志編』訳稿一冊 立教大学図書館新座保存書庫大久保利謙文庫所蔵（p.273）

静嘉堂文庫所蔵訳稿は、第一編から第十三編（全十一冊）までそろった完全訳稿であり、東北大学狩野文庫所蔵訳稿は、第四編まで四冊の訳稿、立教大学大久保文庫所蔵本は、第一編一冊のみの訳稿である。静嘉堂文庫訳稿と大久保文

庫訳稿については、大久保利謙（1966）に概要の説明があり、狩野文庫訳稿については、阿野文朗（1995）にその概要が説明されている。また、これら3種の訳稿以外に、

#### 松村謙三旧所蔵本

があつたようである。本稿では、この松村謙三旧所蔵本について、疑問点を整理した後に、各訳稿の順番と具体的内容について述べることにする。

なお、刊本については次のものが明治初期に刊行されたものである。

・静岡版 見返しに「明治庚午初冬新刻」とある版（13編11冊）

・同人社蔵版 見返しに「明治四年辛未七月新刻」奥付「同人社蔵版」とある版（13編11冊）

・六書房蔵版 奥付「六書房蔵版」とある版（13編8冊）

## 二 『西国立志編』訳稿における

### 松村謙三旧所蔵本の位置

現在所在が明らかな3訳稿の他に、平川祐弘（2006）によると、衆議院議員松村謙三が所持していた訳稿があつたようである。平川（2006）では『時事新報』（19

54年5月2日）の記事を引用し、松村が神田で買い求めた訳稿があつたことを指摘している。松村が最初に訳稿について記したのは、大正十一年の次の文章かと思われる。

中村敬宇先生は、明治期の大儒である。漢學の深き素養のあるうえに英學の達者な而かも人格玲瓏玉の如き學者である。其譯著「自由の理」は「スチュアート、ミル」の「オン、リバーター」を初めて我國に紹介せるもので實に我國に自由民權の思想を植えた權輿であつた。又「スマイル」の名著を譯せる西國立志篇及品行論は實に明治年代を通じて最も偉大なる感化を世に與へたる記念す可き大著たるは誰も知る所である。（中略）今敬宇先生の此の三名著の原稿、先生が苦心推敲の跡歴々たる先生手筆の原稿が殆ど全部定本で偶然余の手に入りたる、何たる奇縁であらう。（『福光青年會報第十二号』大正十一年一月三日。引用は松村謙三（1977）「敬宇先生の遺稿」p.74による）

この文章によれば、大正十一年の時点で、『西国立志編』『自由之理』『西洋品行論』の原稿「殆ど全部」を持つていたことになる。なお、後にその原稿は、当時の民政黨總裁、町田忠治に貸し出したのち、町田が松村の衆議院選挙の資金捻出に際して、博文館の大橋新太郎に売り、その後その原稿がどうなったかは、松村謙三にも分からないとある

(松村謙三(1954))。大橋新太郎の大橋図書館の蔵書を引き継いだ、芝増上寺の三康文化研究所附属三康図書館には、現在所蔵されていないとのことである。したがって、所在は不明である。

訳稿3種を比較する前に、この松村謙三旧蔵の訳稿の位置づけについて、分かる限りを明らかにしておこう。その手がかりは、松村謙三が書き残した記述にある。

立志篇原稿の第一頁の欄外に原語でネグレゼンス イズ グレト エネミー「怠慢は大敵である」と落書してある。(中略) 几帳面な先生は必ず欄外に執筆の日附を記して置かる、そして非常に苦心せられたもので、中には完膚なき迄に直した上に書き直し一日漸く敷衍しか進まぬ日もあり、又よく進行した日も一頁を超ゆる事が稀である。然し決して数日も放擲してある事は少なく嚴重に毎日毎日遅く而かも堅實に行程を進めて居らる、而かも執筆は大抵早朝にて爲されたる如く、中には午前二時と書き記してある所もある。

原稿紙は多く二十字詰十行の赤色罫紙に極めて眞面目に書き下してある。西国立志篇及自由の理の原稿は先生が未だ敬太郎と稱し敬齋と號して居らる、時代で原稿の折目に敬齋鈔本と記してある。

この記述からは、訳稿の体裁として、

①原稿第一頁の欄外に「Negligence is great enemy」と記してある

②原稿欄外に日付が記してある(日付には「午前二時」とある箇所がある)

③原稿用紙は「二十字詰十行の赤色罫紙」であり、折り目部分に「敬齋鈔本」とある

といったことが分かる。さらに、別の箇所には、「立志編」「自由之理」「品行論」を通しての特徴か、あるいはその中の1本の特徴か「此の遺稿」の指すものが特定できないが、次のような指摘もある。

此の遺稿を見て特に感ずるは其當時適切なる譯字に乏しかつた事である。夫が爲め先生が苦心せられた事は非常のもので適譯がなくて數回に互つて朱筆を加へられた推敲の跡が歴々として到る所に見ゆる。例へばマガデン(雜誌)と云ふ字を譯するに當時猶適當なる文字がなくて結局雜報と記せるが如き、或は英國のパーリヤメント(議院)も定譯を得る能はずして之を百姓院と譯し更に之を朱で消して幾度か改書して、而かも會心の字を得難く最後に原語の發音通り巴力門バリーヤメントと記し其下に(公衆の集會する所)とせるが如き、(下

略)

これから分かる訳稿の体裁は、

④ 推敲の跡が歴然としている

⑤ 推敲では朱筆が使われている

⑥ magazin を「雑報」と訳している

⑦ parliament を最初は「百姓院」と訳し、朱で消して、

いくつか別の訳を試みた後、「巴力門（パワースメント 公衆の集 會する所）」と訳している

多くの推敲部分が見られ（④）、その推敲は朱筆によって行われている（⑤）ことになる。「朱筆」は、第1〜3訳稿においても、点（読点・句点の両用）や傍丸印などで使われている。しかし、まさに「朱」で推敲が成されたのだとすると、現存の3訳稿はいずれも「黒墨」で削除・訂正が行われているから、3訳稿以外の原稿があったことになる。しかし、②日付の問題がある。常識的に考えて、日付

は最初の訳稿において附されたと考えるべきだろう。日付が「数行しか進まぬ日」があったとあるから、毎回の原稿執筆段階において書き添えられたとするのが自然であり、二回目以降の推敲過程で附されたものとは考えにくい。ただし、時間に「午前二時」とあるのが正確だとすれば、静嘉堂文庫にはそれに正しく相当する記述がない（「夜二時」「朝四時」等の記述は見られる）。したがって、二つの場合が考えられる。

A 「朱筆」「午前二時」とあるのが正確であったとすれ

ば、別の原稿が存在した。

B 「朱筆」「午前二時」とあるのが記憶違い等であったとすれば、松村旧蔵訳稿は静嘉堂文庫所蔵本である。

なお、松村の文章は最後にこうある。

此の先生の遺稿は先生の遺族の手より文學博士狩野亨吉先生の手に入り珍襲せられたが更に轉々して偶然余の手に歸したのである。

これは、手元の訳稿が、狩野亨吉旧蔵本という認識があったことになる。そのあたりの事情は、別の文章でも述べられている。『時事新報』昭和二年五月二日付けの随想「惜しき文化財：中村敬宇先生遺稿のこと……」には、次のようにある。

大分前の話になるが、僕が代議士に出てから五、六年の頃である。狩野亨吉（マツノ）という文学博士があった。相当な蔵書家で、世界中の珍本を集めた人である。ところがこの狩野博士が何か他人の保証に立つて蔵書を全部売らねばならぬハメになった。

僕はこの蔵書の売りたてを見に行つた。その中に埃まみれで荒縄で縛つた紙くずがある。よく見ると原稿の束で、敬宇中村先生の書いたものである。

東北大学狩野文庫には、不完全ながら3本の訳稿がある。

そのことと松村の記述を合わせ考えると、3本が一緒に移動（整理、売却）していた可能性が考えられ、狩野文庫所蔵本の可能性を残している。大久保（1966）には、静嘉堂文庫訳稿が「大正十三年九月、「敬字日乗」とともに狩野享吉氏からの購入である」とある。したがって、松村の記述（大正十一年以前に購入し、昭和三年の選挙に先立って大橋新太郎に売った）とは異なる。

松村謙三の記述については、回想に不統一が見られる（大橋新太郎に売却した時の金額など）ので、更なる考察が必要であるが、日付が附されていた記述が重要であり、現時点では静嘉堂文庫本の可能性が最も高いと思われる。

### 三、各訳稿の体裁上の概要

静嘉堂文庫、東北大学狩野文庫、立教大学大久保文庫の3訳稿の訳稿体裁の概要を述べる。まず共通する点を挙げると次のようになる。

- ・ 同一の原稿用紙。楮紙・薄いページジュ色で、楮紙よりも濃い赤（代赭色）で四周単辺、内側に二〇字×一〇行のマス目、每半葉一八・〇×一三・六cm。版心部分下部に「敬齋鈔本」とある。
- ・ 墨書、細筆。筆跡は、類出する「自」の第一画が長く

なる特徴が各訳稿に見られるなど、一見して同筆かとも思われるが、「巳」の字の終画が静嘉堂文庫と狩野文庫では「巳、巳」に、大久保文庫では「巳」に近く、コトの合字「𠄎」の縦横比が、静嘉堂文庫・大久保文庫に比して、狩野文庫訳稿の一部に横長の字があるなど、別筆（一部別筆）の可能性もある。なお中村正直の日記「敬字日乗」と比較しても字体は似通っている。

・ 漢字カタカナ交じり文。

次に、各訳稿の特徴を挙げておく。

#### ① 静嘉堂文庫所蔵訳稿

- ・ 13編11冊は、後の刊本と同じ形式（二・三編と六・七編は各一冊としてまとめられている）であるが、表紙が静嘉堂のものであり（黄色表紙に透明な植物文様があり、「静嘉堂」の三字がデザインされている）、静嘉堂で改装して表紙を付けたものである。元原稿の段階で、完本と同じような何らかのまとまりがあったかは不明。（なお、松村（1954）では、訳稿を製本したとしている）
- ・ 第一編の最初の半丁が他の用紙の色と比べてやや黒ずんでいる。また、第一三編の最後の半丁も、他の丁の色と比べてやや黒い。これは、装丁される以前に、一定期間、一番上の用紙と最後の用紙がより多く外気にさらされた

結果と推定され、訳稿全体がまとめて保存されていたためかと思われる（これが、松村謙三（1954）「荒縄でくくった」原稿の跡なのかは不明）。

・天地及び背の部分がそろっており、上欄の文字上部が欠けている場合が見られるので、製本にあたって数ミリ程度裁断されたとみとめられる。

②東北大学図書館狩野亨吉文庫所蔵訳稿

・表紙に当たる紙に、「二稿」とある。

・4編4冊 第二編は、二六まで丁数が書かれた後、二六丁の裏を切り取り、再び丁数一から始まり二八で終わる丁数の付け方である。二冊目（第二編）の最後に「五十八枚」と書かれていて、丁数は合っている。切り替わりの部分における話題は、刊本では「十二 維廉・李并二織機」(ウィルレム・リー William Lee) の部分である。刊本で一丁と二行に過ぎないこの節は、狩野文庫本では四丁半ある。静嘉堂文庫から増補したが、刊本に際して第二編全体を大幅に削除した可能性があるが、今後の調査としたい。

③立教大学図書館新座保存書庫

大久保利謙文庫所蔵

・天地の部分に虫食いが多く、薄い和紙で裏打ちがしてある。

・九丁までは丁数が記されているが、以降は最後まで丁数が書かれていない。

各訳稿の丁数（本文のみ）を、刊本（同人社蔵版）をあらわして示すと表1のようになる。

表1 各訳稿本文の丁数

薄く網を懸けた部分は、一冊に装丁されている編。

参考として同人社刊本の丁数を記した。

表1	静嘉堂文庫 (20字×10行)	狩野文庫 (20字×10行)	立教大学本 (20字×10行)	同人社蔵版 (24字×12行)
編数	丁数			
1	36	46	46	32
2	21	54		23
3	10	20		14
4	25	31		22
5	36			32
6	25			23
7	9			9
8	34			32
9	31			29
10	25			24
11	47			45
12	27			24
13	40			35
計	366	151	46	344

#### 四、一 各訳稿の成立順序

これまで、荻原（1990）にしたがって、静嘉堂文庫・東北大学狩野文庫・立教大学大久保文庫の順で記述してきたが、これは訳稿の成立順ではない。狩野文庫の訳稿表紙に「二稿」とあることから、荻原の訳稿の挙げかたもそれに倣っているのであろうが、荻原も訳稿の成立順については何も述べていない。もつとも、静嘉堂文庫訳稿が初稿であることは間違いないであろう。

三訳稿を並べてみれば一目瞭然であるが、翻訳の順序は静嘉堂文庫〔静〕↓立教大学大久保文庫〔大〕↓東北大学狩野文庫〔狩〕である。その点についてまず論ずることとする。

『西国立志編』本文冒頭の丁をみると、その点がすぐわかる。たしかに題名（首題）は、

〔静〕「自助廣説」

〔狩〕「自助廣説」

〔大〕「自助廣説」の「廣説」を白墨（胡粉？）で消し「論」

〔参考〕同人社刊本「斯邁爾斯自助論 一名西國立志

編」

となっていて、静↓狩↓大（以下、各訳稿を略称でも記す）

の順のようであるが、続いてミルとデイズレーリの言葉を訳した部分は、次のようになっている。

〔静〕「彌爾（左傍線一重）ノ詩」曰ク

〔狩〕「彌爾（左傍線一重）曰ク」

〔大〕「彌爾（左傍線一重）ノ詩」曰クの「ノ詩」

を胡粉で削除

〔参考〕同人社刊本「彌爾（左傍線一重）曰ク」

つまり、静嘉堂文庫では「彌爾ノ詩ニ曰ク」と訳して、大久保文庫で静嘉堂文庫を浄書した後「ノ詩ニ」を削除し、それを浄書したのが狩野文庫という過程が見て取れる。

一方、大久保文庫で「自助論」としたのなら、なぜ狩野文庫ではまた「自助廣説」となったのかは説明できない。狩野文庫訳稿第3冊（第三編）冒頭は「自助廣説卷之三」の「廣説」を墨で消して「論」としている。巻一、二、四は「廣説」のままである。各巻に付けられている表紙では、巻之一が「自助廣説」とある以外は、巻之二、三、四は「自助論」となっている。巻之四は正直自筆の筆跡と思われるので（二、三は判断できない）狩野文庫段階においても、よりよい題名を模索して揺れていたかと思われる。最終的には「西国立志編 原名自助論」（外題、見返題、扉題）、「斯邁爾斯自助論 一名西國立志編」（首題）となるわけなので、刊本までいろいろと題名を工夫していたことが、揺

れとなつて表れているのかもしれない。

そこで次に、静→大→狩(↓刊本)の順であることを確認することと併せて、各訳稿本文を見てみよう。

#### 四、二 冒頭部の比較

まず、各訳稿冒頭の題名を比較する(以下訳稿は静  
↓大↓狩↓刊の順で示す)。なお、□は一字空き、△は  
小書きの送り仮名(本文の小書きは右寄せ)、「」は2行  
割り注、/は改行を示す。/下の文章は、金子による注。行  
の左ルビなど左に書かれたものは、右に「㊦」として記す。

静 □第一編 □ 邦國及△ヒビ/㊦national/㊦individualの  
自助ハク

上↑ヲル↑ヲ論ズ 【イニカラゲテウク】 / 「上↑ヲ」  
自助ハク

の訂正箇所「自」にはルビ「ミ」がある

大 □第一編 □ 邦國及ビ 人民ノ自助 ル↑ヲ論ズ

狩 □第一編 □ 邦國及ビ 人民ノ自助 ル↑ヲ論ズ

刊 □第一編 □ 邦國及ビ 人民ノ自助 ル↑ヲ論ズ、

静嘉堂文庫の修正されたものは「邦國及ビ人民ノ自助  
ル↑ヲ論ズ」となり、大久保文庫以下がそれを踏襲する。

ただし、静・大では「及△」(静は「ヒ」と「ビ」が小  
書きされているが、狩・刊では本文に組み込まれている

から、ここでも静→大→狩→刊本の順という考えが支持さ  
れる。

次に、ミルの言葉を訳している箇所を比較する(φは挿  
入箇所、■は不明箇所)。

原文 “The worth of a State, in the long run, is the worth of the  
individuals composing it.” J.S. Mill.

静 彌爾(㊦傍線一重)ノ詩 二ク邦 稱セラル、  
彌爾(㊦傍線一重)ノ詩 二ク邦 一國ノ善國トナル

貴ミヨキ(㊦)  
《㊦貴ミラル、トコロノ》 價位價ハφの人民ノφ——善

貴ラルベキ φ  
——φモノ、φ次第

ヒマシニ集 ■ル 價位 價ナリ  
□□日増 集 ■ル 價位 價ナリ

《校正後本文》彌爾(㊦傍線一重)ノ詩 二ク 一國ノ善國

ト貴ミラル、トコロノ位價ハソノ人民ノ貴ミラルベキモ

ノ、合セ集 ■ル 價位 價ナリ  
ノ、合セ集 ■ル 價位 價ナリ

大 □□彌爾(㊦傍線一重)ノ詩 二ク、一φ國ノ貴ミ

ラル、トコロノ位(①)は対応する英文が上欄に書かれ

ている)

□□價ハ、ソノ人民ノ貴ミラル、ベキモノ、合セ

□□集ル位價ナリ



狩 □□彌爾ミル (左傍線一重) 曰ク 一國ノ貴ビラル、トコロ  
ネウチ  
 ノ位價ハ／

□□ソノ人民ノ貴ビラルベキモノ、合并シタ／

□□ムル位價ナリ／

刊 □□彌爾ミル (左傍線一重) 曰ク 一國ノ貴トマル、トコロ  
ネウチ  
 ノ位價ハ、ソノ人民／

□□ノ貴トマル、モノ、

(左) ヒトツニマトマル  
 合 并 シタ

ル位價ナリ、□□□□／

静・大では「彌爾ミル (左傍線一重) ノ詩 曰ク」と「詩」が入っているが、**大**で「ノ詩」を削除して、それが本文として**狩**になっていることが分かる。すなわち、大↓狩の順である。また、動詞「貴ぶ／貴む」の語形を見ると、**静**・**大**が「貴ミラル、」、**狩**が「貴ビラル、」、**刊**が「貴トマル、」であり、静嘉堂文庫で「ナル↓稱セラル、↓貴ミラル、」と校正したものを浄書したのが大久保文庫、すなわち静↓大の順であることが分かる。また、狩野文庫と刊本の間にも違いがあることから、狩野文庫と刊本の間に多少の差があることがわかる。そのことは、刊本「合并シタル」の部分でも、「ム」の有り無しに差があるから、もう一本の訳稿（少なくとも板下・版下）があつた可能性を示唆し

ている。

大久保文庫と狩野文庫の先後関係は、訳稿の行頭を比べることも分かる。狩野文庫で比較的改変の多い第九節「實事習験ノ學問」で比べると、大久保文庫の十一丁裏3行目以降と改変以前の狩野文庫十二丁表5行目以降はいずれも、「毎日ノ／ヲ出シ／奮勉／ノ學問／テ教ユル／ノ學問」となっていて、完全に一致している。すなわち、どちらかがどちらかを写したと考えられる。狩野文庫では「奮起」が「興起」と改変されていて、刊本も「興起」であるから、大↓狩↓刊本と改変したと見るのが妥当だろう。

以上、本文の比較を通して静嘉堂文庫訳稿↓大久保文庫訳稿↓狩野文庫訳稿↓刊本の順であることは確かであろう。

## 五 いくつかの語について

訳稿がいくつかあつた場合、語の改変過程に関心が向くのは当然である。今後、静嘉堂文庫訳稿を精査していく中で、そうした語の改変過程を明らかにしたい。現段階では、一定程度の改変が見られる第九節「實事習験ノ學問」の部分から何点か報告しておく。

原文 energetic

精力 ↓ 勢力

静 精力

大 勢力 ↓ 精力

狩 精力

参考

energy 『英和对訳袖珍辞書』(文久二) 威勢 力

駈トシタル

『英和对訳袖珍辞書』(慶應三、江戸) 威勢 力 働

ロフシャイト 『英華字典』inherent power 力 勢力

心力 精力 (以下別の意の訳語)

『哲学字彙』勢力、元氣 (『英獨佛和哲学字彙』(1

912) 勢用、勢力、元氣、氣力)

これによると、刊本の「精力」は、「精力」か「勢力」で迷った末の訳だったことが分かる。明治期の英和辞書を見ると energy の訳として「勢力 精力」の両語があてられているようだが、後に外来語「エネルギー」として定着するなど、もともと捉えがたい概念の語であったといえよう。

同じ節の最後には、「A man perfects himself (人間自身

の完成に向けて)」と「by work more than by reading…」などと対比的に述べている箇所がある。perfects

の訳は次のようになっている。

静 善ニスルヲハ ↓ 完美ニスルヲハ

大 完全ニスルヲハ

狩 完全ニスルヲハ ↓ 善ク完全ニスルヲハ ↓

成就スルヲハ

刊 成就スルハ

訳稿によつて少しずつ変え、刊本段階でも「」を削除するなどの変更が見られる。

次に、「成就スル」のに必要なものを対比的に列挙する部分の訳語は、次頁の表2のようになっている。「読書、学習」のように最初から定まっていた語がある一方で、action の訳など、なかなか定まらなかった語があることが分かる。Character は後に訳したスマイルズ『品行論』の原題であり、翻訳初期の段階で「character ≡ 品行」という訳があったことが分かる。また、biography などは、静嘉堂文庫訳稿の最初にある「伝記」が現代の定訳と言えよう。「biography ≡ 伝記」という対応が、中村正直に見られるということである。

おわりに

中村正直訳『西国立志編』の現存3訳稿が、静嘉堂文庫訳稿↓大久保文庫訳稿↓狩野文庫訳稿の順で作成されたことは、ほぼ間違いないと推定できる。

表2

Self-help	work	reading	life	literature	action	study	character	biography
静嘉堂文庫	作↓作勞	讀書	閱歴	藝文	行↓行為↓實行	学習	品行↓實↓人品ヲ觀ル	傳記↓言行傳
立教大学本	作勞	讀書	閱歴	藝文	實行	学習	人品ヲ觀ル	言行傳
狩野文庫	作勞	讀書	閱歴	藝文	實行 ↓ 行事	学習	人品ヲ觀ル	言行傳
同人社蔵版	作勞	讀書	閱歴	藝文	行事	学習	人品ヲ觀ル	言行録

今後は、完全訳稿である静嘉堂文庫訳稿をより詳しく調査し、訳稿の初期段階を資料として利用できることを課題としたい。ただし、単に訳語の来歴を刊本よりも一年さかのぼれる（翻訳は明治三年四月〜十一月、刊行は四年）ということだけでは、日本語史に重要な貢献をなす研究とは言いがたい。そうしたことを基礎的な作業として行いつつ、静嘉堂文庫訳稿そのものを詳しく検討することで、翻訳作業過程において、一般にどのような類型化が可能なのかを探ることも課題としたい。翻訳論として翻訳作業の研究過程を明らかにすることも、日本語研究の興味深い分野であり、3 訳稿が現存しているという状態は、その分析に貢献できる得難い資料であると考えらるからである。

【参考文献】

阿野 文明（1995）「中村正直訳『西国立志編』、『西洋品行論』、『自由之理』をめぐって」『木道子』、20巻3号、1-5

大久保利謙（1966）「中村敬字の初期洋学思想と『西国立志編』の記述及び刊行について——若干の新資料の紹介とその検討——」『史苑』、第26巻（第2・3号）、67（158）-92（178）。ed. 史学科創設四十周年記念特集号

荻原隆（1984）『中村敬字と明治啓蒙思想』早稲田大学出版部

荻原隆（1990）『中村敬字研究…明治啓蒙思想と理想主義』早稲田大学出版部

平川 祐弘（2006）『天ハ自ラ助クルモノヲ助ク 中村正直と『西国立志編』』名古屋大学出版会

松崎 安子（2013）『中村正直の翻訳態度』『国語学研究』52

松村 謙三（1977）『花好月円…松村謙三遺文抄』松村正直（ほか）編、青林書院新社

松村 謙三（1954）『惜しき文化財…中村敬字先生以降のこと』、『時事新報』昭和29年5月2日

【付記】 静嘉堂文庫、東北大学附属図書館、立教大学新座図書館には、資料の閲覧に際してご配慮いただいたことを深く感謝いたします。また、「第一八八回 青葉ことばの会」

(二〇一三年十二月十四日、明治大学)において口頭発表  
したさいに、多くの方々から貴重な質問や御意見をいた  
だいたことにも深く感謝いたします。

(かねこ・ひろし、本学教授)